

2025 AUTOBACS SUPER GT Rd.2 FUJI GT 3HOURS RACE REPORT

SUPER GT 2025 第2戦 富士3Hours レースレポート

開催日：公式予選 5月3日(土)／決勝 5月4日(日)

開催地：静岡県 富士スピードウェイ

予選レポート

2025年シーズンの開幕戦となった4月の第1戦岡山では、阪口良平選手と富林勇佑選手、そしてチームが一丸となって戦い抜き、ウエットからドライへと変化する難コンディションを見事に読み切り5位でフィニッシュ。14ポイントを獲得する好結果を残し、幸先の良いスタートを切った9号車「PACIFIC アイドルマスター NAC AMG」。良い流れをそのままに5月3～4日に富士スピードウェイにて開催された「2025 AUTOBACS SUPER GT Round.2 FUJI GT 3Hours RACE GW SPECIAL」へ

と挑んだ。

今大会は前戦の岡山とは異なり3時間という長丁場のレースとなることから、阪口選手と富林選手に加え、藤原優汰選手が第3ドライバーに登録され、今季初の3名体制で臨んだ。搬入日となった5月2日(金)は朝から降雨に見舞われ、夕方から雷をともなう強風も吹く悪天候となったが、5月3日(土)は朝から五月晴れに恵まれ、ドライコンディションのもと公式練習が午前9時にスタート。3名のドライバー



が順番に乗り込んだ。

まずステアリングを握った富林選手は連続で10ラップを周回し、このセッションでのベストタイムとなる1分36秒837をマーク。次に、今季初ドライブの藤原選手が自身の合わせ込みを行いつつ、11周をこなして1分37秒949を記録した。その後は阪口選手と富林選手が交代で乗り込みながら、午後の公式予選と翌日の決勝に向けて調整を進めた。最終的にトップから0.493秒の11番手につけ、手応えも感じながらこのセッションを終えた。

迎えた公式予選は、開幕戦同様に阪口選手がQ1を担当。前戦5位で終えた9号車「PACIFIC アイドルマスター NAC AMG」はグループAから出走し、阪口選手は入念にタイヤを温めて終盤にタイムアタックへと臨んでいく。チェッカー間際となる計測

5周目に1分37秒585を叩き出すも、なかなか順位を上げることができない。

さらに連続アタックでセクター2まで自己ベストを更新するラップを刻んでいたが、わずかに及ばず12番手にとどまった。阪口選手自身も手応えも感じ、2戦連続でのQ2進出を目指していただけに悔しい結果に。だが、セットアップとしては決勝でのロングランに焦点を置いていたこともあり、24番手から巻き返しを図るべく準備を進めた。





決勝レポート

決勝日となった5月4日(日)も引き続き好天に恵まれたが、決勝レースを前にやや風が吹き始め、気温は24度／路面温度38度のドライコンディションのもと、午後2時11分に決勝レースが始まった。スタートドライバーを委ねられた藤原選手は、24番手から好スタートを決めてひとつ順位を上げると、さらに3周目には混戦のなか22番手に浮上する。順位を維持しつつ安定したペースで序盤のレースを進めていたが、19周目に12番手争いのなかで接触が起き、1台がTGRコーナー立ち上がりにはストップしたため、フルコースイエロー(FCY)が導入された。

この機にGT300クラスでは早々に義務づけられていた2回のピットストップのうち、1回目のストップを行うチームもあったが、9号車「PACIFIC アイドルマスター NAC AMG」はステイし、開幕戦同様に規定周回のギリギリまで粘ることを選択。8番手を走行していた藤原選手が36周を走り切ったところでピットに入り、富林選手にステアリングを託した。

ピットではミスなどはなかったものの、複数台にアンダーカットを許す展開となり、コースに戻ったときには23番手という順位。しかし富林選手はペースを上げ始め、前との差を少しずつ詰めていきオーバテイクショーを披露する。43周目に21番手、49周目には18番手へとポジションを上げてポテンシャルをみせた。

ところが、富林選手が乗り込んで1時間が経とうとした62周目、ホームストレート上で突然左フロントタイヤにトラブルが発生してしまう。レース中は気温と路面温度があまり上昇せず、事前に想定していた内圧まで上がらず、労わりながら走っていたものの、予期せぬアクシデントに見舞われてしまうことに。そのため予定よりも早いタイミングでのピットを強いられることとなったが、なんとか自力でピットへと9号車「PACIFIC アイドルマスター NAC AMG」を戻し、阪口選手へとバトンを繋いだ。

素早くタイヤ交換と作業を終え、24番手

でレースへと戻った阪口選手は遅れを取り戻すべく怒涛の追い上げをみせた。最終スティントの前半は1分39秒台の安定した好ペースで前とのギャップを確実に縮めていき、残り20分を切ると2台をパスして18番手まで挽回。だが、その時点で残り時間はすでに少なく、それでも前を走る車両との差を0.7秒までに縮めていたが、抜くまでには至らず18位でチェッカーを受けた。

早々から決勝でのロングランに照準を合わせていたこともあり、ドライバーたちは好ペースも実感していただけに、思わぬタイヤトラブルとなってしまった。さらにチェッカー間際には別のトラブルの症状も見られたことは今後への課題とも言える。ただ、終盤にかけても順位を挽回できたことはプラス要素だ。また、今大会も長丁場のレースのなかドライバーだけでなくチーム、中日本自動車短期大学(NAC)の

学生メカニックが一致団結して最後まで戦い抜けたことは次戦以降にも活きることになる。

シーズン第3戦目は2013年以来の開催となるセパン・インターナショナル・サーキットでのマレーシア大会となるが、最大決勝出走台数が少ないことから、PACIFIC RACING TEAMは欠場となる。そのため今大会と同様に富士スピードウェイでの開催となるため、第4戦富士に向けチーム一丸となって引き続き準備を進めていく。



Comment



エントラント代表
神野元樹

今大会も多くのご声援を承りありがとうございました。今回は、阪口選手と富林選手に加え藤原選手と3名の盤石の体制で挑み、アクシデントを跳ね除ける素晴らしい走りを披露してくれました。残念ながら2戦連続でのポイント獲得には至りませんでしたが、NACの学生メカニックをはじめチーム全体がしっかりとクルマを仕上げ、レースを走り切れたことはチーム力の高さだと感じています。次戦もさらなる成績を目指すべく準備を進めて参りますので、ご声援のほどよろしくお願いいたします。

富林選手のスティント時のアクシデントで勝負権はなくなりましたが、ライバルと走ることによって9号車の速いところ、遅いところをしっかりと理解できました。18位はやはり悔しいですが、しっかりとゴールできてよかったです。次戦富士でも今回がベースとなりますが、強くて速いクルマを持ち込みたいです。同じパッケージのメルセデスAMG GT3を使用するチームも多いですが、良きライバルたちを圧倒できるような9号車になれるように頑張りたいです。



阪口良平 選手



富林勇佑 選手

藤原選手が前半に何台か抜いてくれた状態でバトンを受け取り、思ったよりペースもあるように感じたのでタイヤのケアをしながら走っていましたが、想定していたタイヤの内圧まで上らずバーストしてタイムロスをしてしまいました。クルマのポテンシャルは悪くなかったものの、すべてが思ったとおりの展開にはなりませんでしたが、ピットではNACの学生メカニックのみなさんも頑張ってくれたので、次戦はしっかりとチームとみんなでより良いクルマを作ってポイント獲得だけでなく、表彰台も狙えるように準備をしてさらに成長していきたいです。

スタートドライバーはとても緊張しました。最初のスタートは予選Q1で使用した別のコンパウンドを使用しました。クルマのバランスとしてはアンダー寄りだったので、ロングランで強みが出てきました。一発のタイムを出すことはできませんでしたが、クルマが安定してくれたので淡々と追い上げることができました。今回はさまざまなコンディションの下でタイヤの症状を見ることができたので、すごく勉強になった一戦でした。



藤原優汰 選手

PARTNER



THE IDOLM@STER™ & ©Bandai Namco Entertainment Inc.



SPONSOR

